



共に創り、つなぐ、稲作情報 vol.1

南会津農林事務所農業振興普及部 Tel 0241-62-5262

南郷普及所 Tel 0241-72-2243

令和5年3月17日

※この資料は、令和5年3月1日現在の農薬登録情報に基づいて作成しています。

※この資料は、県ホームページでも公開しております。

<http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/36250a/inasakugijyutuyouhou.html>

◎令和5年産米の播種作業が始まります。
健康な苗作りに取り組みましょう。

<ほ場準備>

耕起(春耕) **秋耕していない場合**

- ・稲わらや堆肥等の有機物はすき込んでから分解するまで時間がかかります。
⇒分解が不十分なまま入水すると、移植後にガスがわきやすくなりますので、**可能な限り早い時期に耕起し、すき込み**を行いましょう。
- ・苗床の準備も計画的に進めましょう。

<育苗>

○作業の前に **病害リスクの少ない清潔な環境づくり**

- ・作業場や育苗施設周辺にある稲わらや籾殻、ほこりには病原菌が付着している可能性があるため、作業前にしっかりと清掃しましょう。
- ・種子の保管は風通しが良い日陰で、直接地面に置かないようにします。

1 種子の準備

(1) 塩水選(消毒済種子でも必ず実施しましょう!)

- ・発芽力の高い種子を選ぶために必要です。塩水を作る時は、比重計を使い、比重をうるち米の場合 1.13(食塩の場合 2.1 kg/10ℓ、硫安の場合 2.7 kg/10ℓ)、もち米の場合 1.10(食塩の場合 1.6 kg/10ℓ、硫安の場合 2.0 kg/10ℓ)とします。
- ・薬剤を洗い流さないよう塩水選後の水洗いは、きれいな水で数回すすぐ程度としましょう。

(2) 種子消毒(未消毒種子を使用する場合)

(対象病害名：いもち病、苗立枯細菌病、ばか苗病、もみ枯細菌病)

浸漬法	テクリードCフロアブル 200倍液、24時間浸漬 ⇒ 風乾せず浸種 ※種子と処理液の容量比は1：1以上としてください。
	温湯種子消毒法 ① 60℃のお湯に正確に10分間浸漬 ※温度が高いと発芽不良、低いと防除効果が不足するため、正確に湯温を維持する ※浸種直後に袋を揺りうごかす ② 処理終了と同時に流水等で速やかに粗温度を下げ、浸種に移行する。

2 浸種 **酸欠に注意しながら十分吸水させましょう。**

- ・水量は種子量の2倍以上、浸漬水温は10～15℃とし、時間をかけて吸水させましょう。
- ・浸漬時間は積算温度で120℃(浸漬水温×日数)を目安に行いましょう。
- ・酸欠防止のため、定期的に水を交換しましょう。

種子は袋にぎっしり詰めすぎない
種子袋は平らに、水はたっぷり余裕をもって

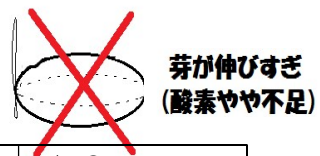


3 催芽 **播種前にハト胸の状態まで均一に芽出し！**

- ・育苗器や催芽器の温度設定は28℃設定にします。
(30℃以上はもみ枯細菌病発生の危険性があります)
- ・育苗器内では種子もみ袋は均一になるように薄く広げます。
- ・育苗器内の温度は温度計で確認しましょう。

4 播種 **苗の種類と育苗日数は、播種量で決まります。**

- ・苗の種類に見合った播種量を厳守し、均一に播種することが良い苗づくりのポイントです。
- ・田植え日から逆算し育苗日数を計算して播種日を決めましょう。



5 播種量と苗の生育目安について(参考)

苗の種類	播種量 (乾粃 g/箱)	育苗日数 (日)	草丈 (cm)	葉齢 (葉)	10a 当たり 箱数 (箱)
密播苗	250～300	15～20	10～15	2.0 前後	7～14
稚苗	180～200	20～25	10～13	2.2～2.5	18～20
中苗	160～180	30～35	13～15	3.0～3.9	26～30

- ・灌水に併せて**苗立枯病の薬剤防除**を行いましょう。

⇒<使用薬剤例>

ナエファインフロアブル…2000 倍液を 1 箱あたり 500～1000ml かん注
ダコニール 1000…500～1000 倍液を 1 箱あたり 500ml かん注

6 出芽の温度管理

《育苗器を利用する場合》：温度は28℃に設定、日数は2日程度が目安。

《ハウス内に平置きする場合》：ハウス内の場合も温度は28℃が目安です。

例年苗ヤケが発生しています。苗ヤケ防止のため30℃を超えないよう

適宜換気を行い、被覆日数は5～7日間を目安としましょう。

- ・出芽率80～90%、芽の長さ5～10mmを目安に緑化に移りましょう。

【緑化の温度管理】

- ・出芽後緑化の際は日中20～25℃、夜間12～15℃で管理しハウス内温度を28℃以上にしないよう管理しましょう。

【密播苗について】

- ・密播苗は育苗期間が短く育苗箱数の削減が期待できます。しかし、葉齢2.3を越えると、苗の生育が停滞し、移植後の活着遅れのリスクが高まるので注意が必要です。

◎病害虫対策を再確認しましょう。

<令和4年産米の反省点>

1 斑点米カメムシ類対策 1000粒に被害粒が2粒入ると等級落ちに！

- ①耕種的防除：出穂10日前までに畦畔や雑草地の草刈りや水田内の残草処理を徹底し、カメムシ類の密度を抑制しましょう。

令和4年作柄判定ほ 出穂期	里山のつぶ（下郷）	8/7
	ひとめぼれ（田島）	8/9
	コシヒカリ（只見）	8/9

- ②薬剤散布：出穂10日前以降にカメムシ類の発生が畦畔で認められた場合、薬剤散布による防除を行いましょう。

噴霧機による液剤 （散布剤）等	乳熟期（出穂期の7～10日後）の防除を基本とし、その後発生が予想される場合は、7日おきに追加防除する。
--------------------	-----------------------------------------------------

粒剤（水面施用剤）	穂揃期～乳熟期に湛水状態で散布し、その後7日間以上は止水する。その後、多発が予想される場合は散布剤で追加防除する。
-----------	-----------------------------------------------------------

※ドローンを使った薬剤散布作業を受託されている方もおりますので、薬剤散布の時間が無い方など、興味・関心のある方は農林事務所までご相談ください。

2 いもち病対策の徹底

まずは予防剤で防除！

育苗箱処理剤及び本田での予防剤散布を基本として、ほ場を観察し、発生初期の治療剤散布を徹底してください。

《箱処理剤》

薬剤名	対応病害虫	施用量 (1箱あたり)	使用時期	使用方法
ルーチンブライ ト箱粒剤	いもち病 紋枯病 イネトモムシ イネズグウムシ	50 g	播種時（覆土前）～移植当日	育苗箱に 均一散布
		高密度に播種する場合は50～100 g	移植3日前～移植当日	
Dr. オリゼ パディート 粒剤	いもち病 イネトモムシ イネズグウムシ	50 g	緑化期～移植当日	育苗箱に 均一散布
		高密度に播種する場合は50～100 g	移植3日前～移植当日	

《本田処理剤》

薬剤名	対応病害虫	施用量 (10 aあたり)	使用時期	使用回数 の制限	使用 方法
オリブライト 1キロ粒剤	いもち病 紋枯病	1 kg	出穂10日前まで ただし、収穫45日前まで	1回	散布
フジワン ラップ粒剤	いもち病	4 kg	(葉いもち) 初発7～10日前 (穂いもち) 出穂10～30日前 (ただし、収穫30日前まで)	2回 以内	湛水 散布
	カメムシ類		収穫30日前まで		
	稲こうじ病		出穂10～30日前（ただし、 収穫30日前まで）		

次回発行は4月上旬(出芽～硬化のハウス管理について)予定